

【鉢木】はちのき

「いざ鎌倉」ということわざがありますね。主君の大事に逸早く駆けつけ命がけで働く心構えをいいます。現代では様々な使い方があるようですが、本来は恩義の重さ、忠義の精神を表わす言葉です。この言葉は曲謡『鉢木』の「是は只今にてもあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりともこの具足とって投げかけ、錆びたりとも長刀を持ち、瘦せたりともあの馬に乗り、一番に馳せ参じ…」を出典とすることわざです。

『鉢木』は鎌倉時代の上野国佐野、現在の群馬県高崎市の佐野を舞台とします。

ある旅の僧が雪の降る佐野を通りかかります。民家に一夜の宿を請いますが、亭主、佐野源左衛門常世は見苦しい粗末な家を恥じ一旦は断ります。しかし、雪の野宿を気の毒に思い一夜の宿を貸すことにしました。粟飯を勧め暖をとりますが、貧しい家には薪も充分にはなく、常世は大切にしていた梅、桜、松の盆栽を切って囲炉裏に投じ篤く僧をもてなすのでした。そして、常世は一族の者に所領を横領され落ちぶれているが鎌倉武士の誇りは健在で、事あらば瘦せ馬に鞭打って いざ鎌倉 と一番に馳せ参じる覚悟であることを熱く語るのです。

翌朝、旅の僧は名残惜しく立ち去ります。その後、鎌倉より関八州の武士に召集がかかり、常世は勇んで鎌倉へ馳せ参じます。前執権北条時頼(最明寺入道)は集まった武士の中から常世を召し、あの時の旅の僧は自分であったことを告げ再会を喜びます。そして、常世に領地安堵を約束し鉢木に因み梅田、桜井、松井田の庄を与えたという話です。

佐野源左衛門常世なる人物は実在が確認できず、この話はフィクションのようです。

- ・駒とめて袖うちはらふ陰もなし佐野の渡りの雪の夕暮 『新古今集』藤原定家  
〔下馬して袖の雪を掃う物陰すらない そんな寂しい佐野の渡し場の夕暮れよ〕

佐野の雪景色を詠んだこの歌は、謡曲『鉢木』にも引用されていますが、定家は上野国を一度も訪れていません。歌の佐野は『鉢木』の舞台ではなさそうです。

この歌は

- ・苦しくも降りくる雨か三輪ヶ崎 佐野のわたりには家もあらなくに

『万葉集』長奥麻呂

〔困ったことに雨が降ってきた。三輪崎の佐野の渡し場には雨やどりする家もないのに〕

の歌から想を得たものといわれています。雨を雪に替えて詠んだところに定家の才が見られます。

三輪崎佐野は現在の和歌山県新宮市にあります。当時、熊野詣の拠点となったところです。定家は建仁元年(1201)の一度だけ、後鳥羽院に随行し熊野の佐野を訪れています。しかし、この歌は現地を訪れる前年の『正治二年院初度百首和歌』に見えます。つまり、定家は上野国であれ熊野であれ、佐野を訪れて詠んだわけではないのです。

私はこの歌の佐野が何処であっても、定家が現地を訪れていなくても、歌の評価においてさしたる問題ではないように思います。この歌は写生、体験の歌ではなく、イメージの合成による歌なのですから。

それにしても、「雪の夕暮」という奇抜な表現が効いて、『鉢木』に極めて近い雪景色を思わせる歌です。

待合にこの歌の画賛を掛け、梅、桜、松に因む道具を揃え筒茶碗を用いた茶会にかつてよばれ

たことがあります。掛物は「紅炉一点雪」。

『鉢木』は囲炉裏の暖をご馳走に貧しくとも篤くもてなす話であり、厳冬の季節の茶によく馴染む銘だと思えます。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~